林間学校

児童対策に参加して

明治町分会　S・S子

八月六日より、八月八日までの林間学校に参加した、子どもに大人の男女あわせて九十八名。（大人二十三名）

午後十二時三十分大牟田郵便局前集合に、時間より早くきている子どもがいます。

三池の子どもたちです。一人ひとりよく見ると、中には自分の体より荷物の方が大きく、リックの中には、キャンプに必要な米五合、カレー皿、汁わん、はし、スプーン、水筒、タオル、水着、バスタオル、毛布、雨衣、長袖シャツ、トレパンなどがいっぱい。

その、ふくれたリックを背負って、にこにこしながら、少しはずかしそうに、豆キャンプたちがつぎつぎに集合してきました。いまの言葉でいうと、カッコイイとでもいいましょうか、どの顔を見てもうれしそうでした。

私も高校時代にいったきり。何年ぶりかで、子どもとともに、黒川の空気をいっぱいすってこようと、はりきっておりました。

それぞれの支部に別れて、一号車、二号車、と出欠をとられ、車内の人となりました。

荷物も、山のようにのりました。

出発する前に、黒い背広を着た会社代表のオジサンのごあいさつをうけ、その後で、子どもたちのお父さんの仲間のオジサンの、わかりやすい、元気でいってきなさい、とのやさしい言葉を頂き、両親のもとを離れ、公害の町大牟田を後に出発しました。

築町、栄町、東新町と通り抜け上内にはいり、高速道路を通り抜けるころには、さすがに子どもたちは静かになりました。

ところがやがて、ポツンポツンと、子どもたちの歌が流れてきてガイドさんも十分とはいえないまでも、何曲か歌ってくれました。

このようにして、バスの中も楽しくなり、黒川温泉キャンプ村につきました。

大牟田とくらべて、空気も抜群。

山のにおいがして、わあわあの連発でした。

時間より早く着き、草作りの小屋にそれぞれ荷物をおき、お母さんの心のこもったお弁当を、大きいリックから取りだして食べる子どもの満足そうな顔を見たときは、私もついてきてよかった、としみじみ思いました。

夕食の後、子どもたちはなかなかねむれそうになく、夜おそくまでお話が聞えておりました。

次の日は、朝早くから歯ブラシを手に手にカチャカチャと音をたてて走りまわっておりました。

七時にラジオ体操。朝食の後でゲーム。午後より水泳。子どもたちは、バッチリとくまれたスケジュールのため、勝手な行動は許されません。

夜はキャンプファイヤー。歌をうたったり、フォークダンスをしたり、いつもはうたわない子どももうたわされます。

中でちょっと、雨がおちました。服がぬれたり、かわいたりしながら、楽しい時間でした。

食事をするときにも、ここでは、わがままはできません。きらいな物も、食べなければできません。自分だけ勝手な行動はできません。同じことを、みんなの子どもがします。

よごした食器は、自分自分で洗っておかないと、次に食べるときに困ります。

全体で行動し、また全体で遊び、全体で食べるのです。

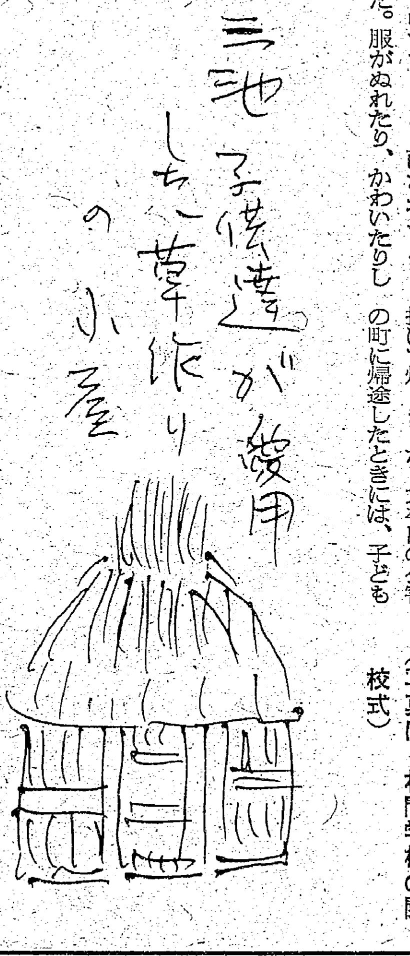
二泊三日の行事でしたが、参加した子どもはよくがんばり、よく理解してくれました。

帰りのコースは、すばらしい瀬ノ本高原を通り、大観望を見て、菊池スカイラインを通り、山鹿を抜けて帰りました。大牟田の公害の町に帰途したときには、子どもたちはつかれて眠っておりました。

お世話下さった役員の方も、大変でございました。けれども、林間学校に参加した子どもたちには、三日間のキャンプ生活がきっと楽しい想い出の一つとなることでしょう。成長したときにも忘れないでいてくれたら、私も幸せだと思います。

この夏季児童対策が、三池主婦会の運動のなかの統一行事の一つだということを会員の皆さまに考えていただき、来期には、今年以上に参加者がふえてくれることを念じ、小さい輪がだんだん大きな輪になっていくように、心から希望しておきます。

（写真は、林間学校の開校式）


三池子供達が愛用
した草作り
の小屋

闘いの歴史に学び解放をめざします

三池主婦会会長　島　フミエ

生命と生活、平和や権利を守り家族ぐるみで闘う三池主婦会は、去る月二十八日、多くの仲間の祝福と励ましの中で、第二十一回定期大会を開催し、さらに前進するため意志の統一をいたしました。

思えば、主婦会二十余年の歴史は、その結成の闘いをもってはじまり、英雄なき百十三日の闘い、三池と安保の闘い、命を守るCO闘争——などなど、命と権利、生活を守って、家族ぐるみに闘いつづけた歳月でした。

しかし、資本の攻撃もまたきびしく、三井鉱山の生産第一主義の人命無視の政策で、三池闘争後百人近い仲間の尊い生命が奪われ、八百余名のCO中毒患者をはじめ、けい肺・熱中症などなど、多くの仲間の健康をおかしつづけながら、なお責任をとるどころか、さらに人べらし合理化を強行しています。

このような、資本の直接的な合理化のしわ寄せと、物価高、教育問題、平和への不安など、主婦会活動は、ますます重要になってきました。

私たちは、諸先輩が築いた伝統ある、三池主婦会の闘いの歴史にまなび、今年も、働く仲間との連帯を深めながら、労働者とその家族が解放される社会主義社会を目指して闘うことを、決意あらたにお誓いし、今後のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げ、新任のごあいさつといたします。

主婦会新役員

どうぞよろしく

去月二十八日、三池炭鉱主婦会は定期総会を開催、新年度の運動の先頭に立つ役員を選出しました。次の人びとです。よろしくお願いします。（敬称は略します）

会　長	島　フミエ	港務出身
事務局長	平川　弘子	本所出身
監　査	永江つや子	四山出身
〃	梅崎　遊久	本所出身
宮浦支部長	岡本タツエ	
四山支部長	百田　都子	
三川支部長	斉藤　清子	
本所支部長	田中　松枝	
港務支部長	大石知恵子	

見てきたソ連邦

国柄を思わせる施策

書記次長　蒲　池　哲　夫

坑内温度対策

ソビエト炭鉱の坑内温度は、二十六度以下と定められている。国の基幹産業として、石炭を大切にし、今後も増産の方向で進む場合、地下千五百メートルまでの採掘を予定しているそうである。

三十メートルに一度上昇する坑内温度（千五百メートルで五十度となる）を下げるのは、大変なことである。

二十六度以下に坑内温度をひき下げるために、熱風を冷風に変えて作業現場に送りこむ研究がつづけられ、成果をあげている。

日本の場合、三十七度以上になれば監督局の許可を受けて、作業を行ってよい（中止ではなく）となっている。わが国の法律や、汗みどろ、濡れネズミの労働を強制される現場と比べると、これまた雲泥の差がある。

空気が涼しいから、厚地の長袖に長ズボン、長靴で作業するソ連の労働者と、パンツと半袖シャツ、時には禁止されている裸体作業さえ行わなければならない、三池の坑内労働者とは比較にならない。

要は、いかに安全に、最高の現条件で労働ができるようにするかについて、果てしない研究がつづいているのである。

救護隊

ドンパス炭田の中の一炭鉱都市であるドニエック市の救援隊本部を見学したが、ここには各炭鉱の大きな図面があり、電気で、そこの状況がわかるようになっている。

災害発生の場合、三交替で勤務する隊員が、一分もかからず五十七名が一台の自動車にとび乗り、五台出動し、同時に医師看護婦を乗せた救急車二台と、災害の規模、程度、状況に応じた特別の作業車（火災用、防爆用、通気用等五台ある）が、指示に従って出動できるようになっている。

隊員の住居は、この本部の敷地内にあり、家族含めて住んでいる。この本部を中心に、市内に同様の設備をもつ八つの支部があり、出動の指令があれば、どこからでも救護にかけつけるようになっている。

三池炭鉱のように、救護隊員は常時採炭や掘進などの現場で作業し、重大な災害の場合に招集されて出動するのとは、まったく違っている。三川鉱大爆発や坑内火災などの場合のようにたとえ救護隊員の出動があっても、現場で消火や救出作業にあたるのは、早くても五時間以上もかかるような状況ではないのである。

福利厚生施設

小さな子供から、小中学校生徒までの子供のための、いろいろな施設が完備され、子供を大切にする国柄が如実に示されている。

人形のように可愛い子供達から花束を贈られ、その明るく清潔な保育所や幼稚園の所内を見学したが、小さなベッドがならべられ、ねんど、積み木、お医者さんごっこなどの白衣までそろえられ、集団生活が行われている。

少し大きな子どもになると、男子ではレスリング、女子ではバレーの練習を、専門の先生がついて教えている。

さらに、夏休みを楽しく過ごすために、ドニエック市の中心から車で二時間ほどの、静から郊外に、チエーホフ園と名づけて、宿泊所や食堂、いろいろな遊び場、プール、動物園、人工の池、散歩道など、広い敷地に公園同様の施設がつくられている。私たちが訪問した時、繊維工場の若い娘さんたちが、ペンキの塗り替え、プールの清掃など、いかにも楽しげに、またにぎやかに、かいがいしく、奉仕作業を行っていた。（写真は、ある地方の保育所）

（以下次号へ）